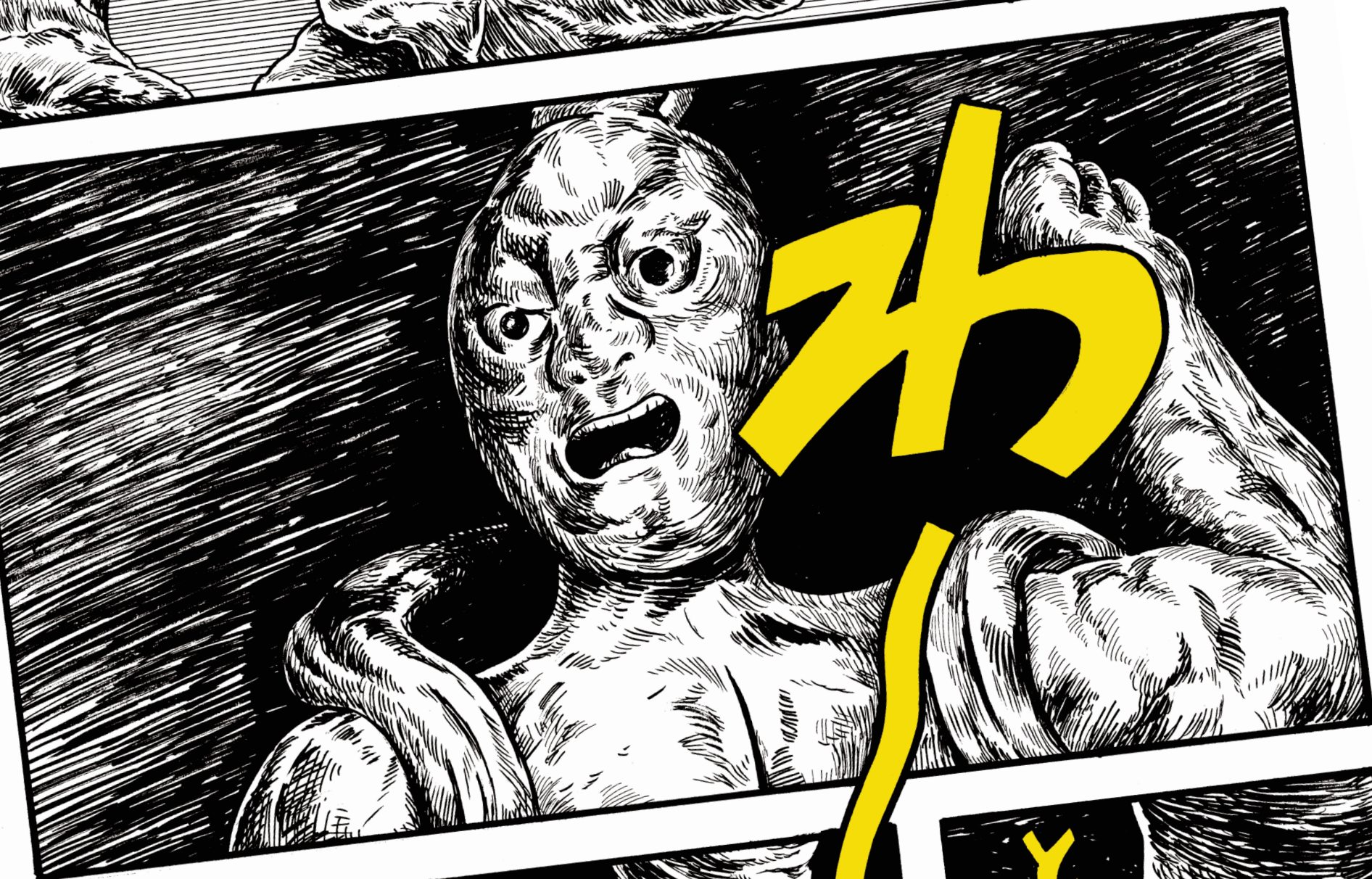
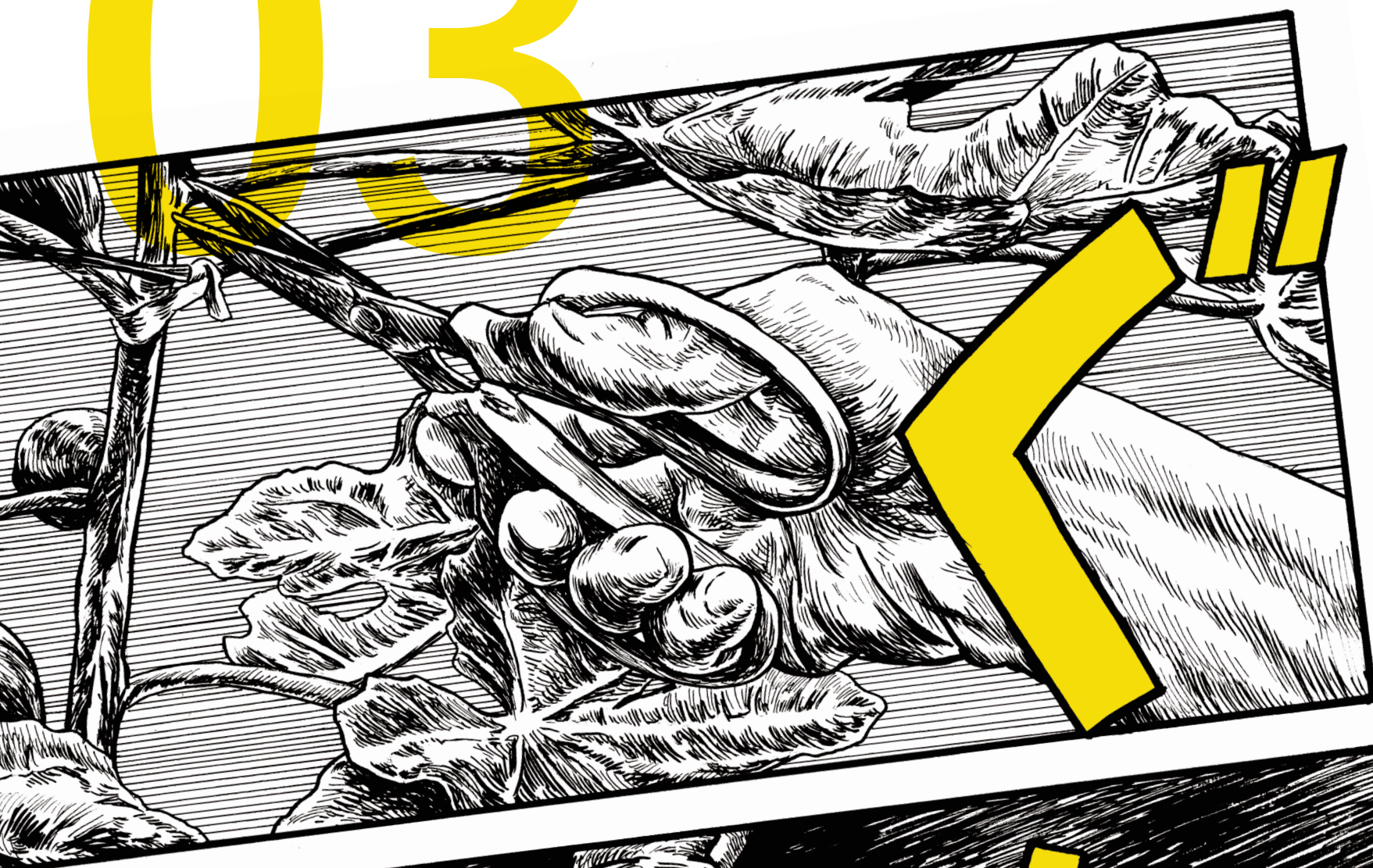






環境としてのジオス（地球）を基盤とする文化現象を「ジオカルチャー」と名づけ、複数の方法論にちて人と大地の関係を紐解いていくことを基本構想とする「ジオカルチャー研究プロジェクト」。

にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクトとして2021年にリサーチを開始して以来、プロジェクトでは地学的・生態学的・人類学的な複数の絡まり合った事象や文化、そのダイナミクスで混種の複数性の共存状況に対し、「ジオカルチャー」の概念にちて迫ってきた。現在、異なる専門性を持つ研究者の協働によって、「野外アクティビティ領域」「伝統・伝承領域」「地域資源領域」の3つの領域においてプロジェクトが進行中である。

「にかほでそとね」をタイトルに新しい野外活動（アウトドアアクティビティ）の創出を試みる映像作家／研究者 萩原健一（秋田公立美術大学ビジュアルアート専攻准教授）は、2022年度は白雪山上流部での滞在と散策、象潟漁港や赤石浜海水浴場、金浦漁港など海岸線に沿った移動と滞在、中島台レクリエーションの森と冬師温泉では学生らと共にある特定の時間を過ごした。活動で精力的な「野外活動」が印象づける固定概念に対し、美術大学生の発想を抽出することで、これまでとは異なる軸の活動可能性を探った。アクティブな野外活動とは異なる視点でのアクティビティに価値を見出し、参加した学生らそれぞれの時間（間暇）の提案と実践をおこなう取り組みは2023年度も継続し、島海山登山等を映像等によって記録している。

人類学者 石倉敏明（秋田公立美術大学アート&ルト専攻准教授）が取り組むのは「野生めぐりにかほ版」である。「野生めぐり」とは、フランスの人類学者クロード・レヴィ・ストロースによる神話的思考の研究「野生の思考」を踏まえ、近代的な科学技術の知によって飼育慣れされていない人間の無意識の未開拓な領域を、アーティストと人類学者による共創的なフィールドワークによって探訪する新たな研究のプロジェクトである。2023年度はプロジェクトの核となる写真家 田附勝氏とのコラボレーションを踏まえ、異なる媒体を扱うアーティストに秋田公立美術大学の修士・博士課程の学生を加え、継続して島海山麓のフィールドワークを実施している。調査活動は参加者の専門性に合わせ、歴史・民俗・芸能・風土研究といった多様な視点によって拡張していき、観察や対話、考察の記録を続けていく。

島海山の山体崩壊で生じた岩屑なだれによって形成された「流れ山」に注目した井上宗則（秋田公立美術大学景観デザイン専攻准教授）の「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」は、「九十九島」と呼ばれる観光名所となっている象潟地区に比へ、仁賀保地区、金浦地区では流れ山の存在が十分に知られていないことから始まったプロジェクトである。2022年度は現地調査・分析に加え、仁賀保地区（平沢）にてトックとまち歩きのイベントを開催した（「手長足長」Vol.2にレポートを掲載）。2023年度は2022年度同様現地調査とイベントをおこない、流れ山が各地域を特徴づける景観要素であり、新たな地域資源であることを提示する。また、石倉敏明の論考「共異体」としてのジオカルチャー」

「手長足長」Vol.2に掲載）を受け、井上は以下の検討・提案をおこなっている。

ジオカルチャー研究プロジェクトでは、「共同体」を更新する「共異体」という概念が重要視されている。「共異体」は「異なるものが、異なったまま共存する社会のあり方」を意味するが、社会学者の若林幹夫は、近代以降の地理的にも社会的にも広がった、全体として形象化されない都市のあり方を「共に異なり」、「共に移動する」という意味で「共異体」「共移体」と表現した[※]。若林によれば、共異体＝共移体としての都市では、近代以前の都市に内在していた他者性・異和性が、増幅された形で現れるという。これは、仁賀保や金浦の集落の特殊性を考えると、示唆に富む指摘である。にかほ市における多数の流れ山は、土地利用がされるまでは定住空間に隣接する「未開」の土地であり、人為的につくられた集落から見れば、長大な時間を有するジオスという「他者」ともいえる存在である。仁賀保や金浦の集落は、こうした流れ山という他者性・異和性をその起源から多分に内包した状態で形成されてきた。一方、土地利用の面からは、流れ山は空白地帯であり、神社や寺院などに利用されることで、近代以前の共同体の形成に重要な役割を果たしてきた。結果、流れ山は異和と調和という両義的な存在として立ち現れてくる。また、近代以降も公民館や学校といった公共施設が建設され、流れ山は近代化を受け止める緩衝帯でもあった。このように（近代）という区切りを超越する流れ山の特殊性は、これからの集落デザインを考える上で興味深い研究対象である。

※若林幹夫『都市の「アトリー」』INAX出版1999

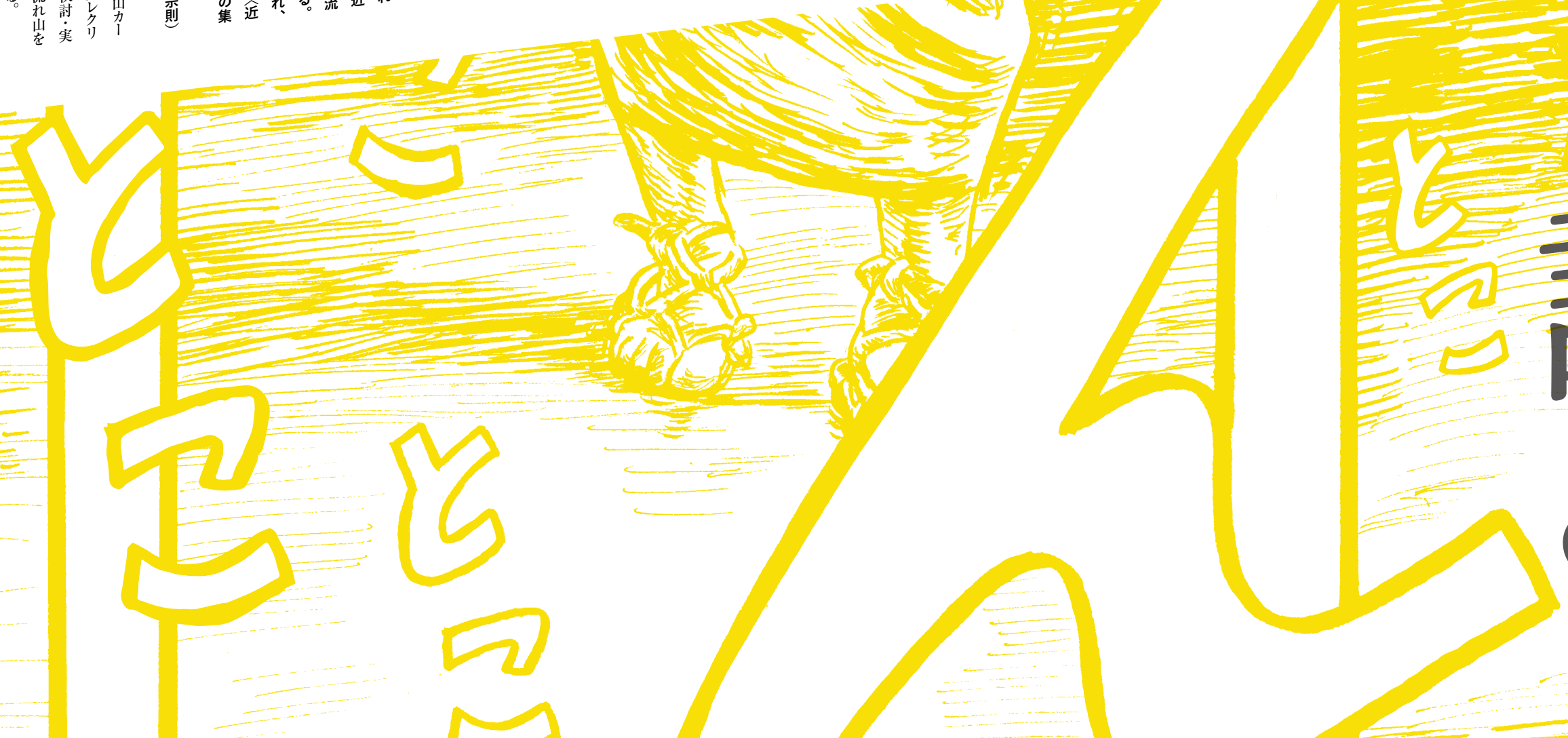
（井上宗則）

流れ山のプロジェクトでは、昨年度試行的に作成した「流れ山カード」など散策を促進するツールの検討や流れ山を活用したレクリエーションの可能性、流れ山の活用を考えるプログラムを検討・実施。加えて、地形の「保存概念」の成立と変遷を考察し、流れ山を地域資源として位置づける理論的背景の構築を進めている。

「共異体」の輪郭を探る試み。

異なる専門領域の

「あいだ」で



福島県 裏磐梯の流れ山

〔1〕裏磐梯の流れ山の概要

福島県のほぼ中央に位置する磐梯山（標高1816m）は福島県のシンボルともいえる山である。磐梯山では山体崩壊が2回起きており、1回目には約5万年前に磐梯山の南側（表磐梯）で発生した。この山体崩壊により猪苗代湖が生まれたという説もあり、猪苗代湖「浮かぶ唯一」の島である翁島は流れ山のひとつである。2回目の山体崩壊は1888年に磐梯山の北側・裏磐梯で発生し、多くの犠牲者を出した。現在は流れ山地形とともに形成された多くの湖沼群からなる景観が福島県を代表する観光資源となっている。

〔2〕地形の保存・活用に関する動向

磐梯山は福島・山形・新潟の3県にまたがる「磐梯朝日国立公園」にして1950年に指定を受けた。2011年には日本ジオパークとして「磐梯山ジオパーク」が認定されたが、2019年には事務局の体制が十分でないことを理由に条件付き再認定（イエローカード）となった。その後改善がおこなわれ、2022年には再認定（グリーンカード）となった。再認定の際に、優れている点のひとつとして「JR 駅や道の駅、ショッピングセンター等における積極的な情報発信によるジオパークの可視化が挙げられている。

長崎県 島原市の流れ山

〔1〕島原市の流れ山の概要

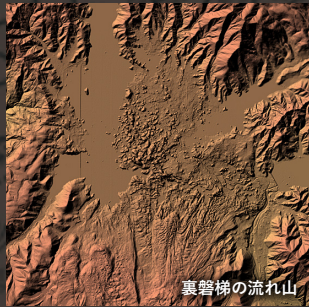
長崎県島原市の西にそびえる眉山は、七面山（標高818・7m）、天狗山（標高695m）、南峰（標高708m）の総称である。1792年に眉山の東側で発生した山体崩壊は、「島原大変 肥後迷惑」とも呼ばれる国内最大規模の火山災害である。その時に有明海に流れ込んだ大量の土砂がふくり出した流れ山群は「九十九島（つくもじま）」と呼ばれ、島原を代表する景観となっている。

〔2〕地形の保存・活用に関する動向

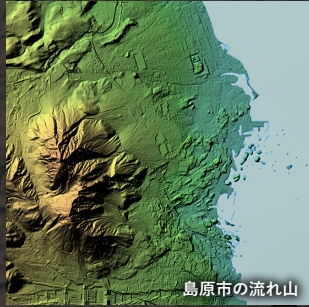
眉山は1934年に「雲仙国立公園」として日本で最初の国立公園に指定された。ただし九十九島は区域外となっており、その理由として、九十九島が「雲仙の山」とは風景上の連絡がなく風致も破壊されており、「優れた自然の風景地ではない」ことが挙げられている[※]。すなわち、国立公園に指定された当初は、流れ山自体は必ずしも景観上重要な存在として認識されていなかったことが指摘できる。その後「島原半島ジオパーク」が2008年に日本ジオパークとして認定され、2009年には日本初となる世界ジオパークネットワークへの加盟が認定された。



にかほ市沿岸部の流れ山



裏磐梯の流れ山



島原市の流れ山

鳥海山、磐梯山 および眉山が生んだ 流れ山の 比較・考察

な存在として認識されていなかったことが指摘できる。その後「島原半島ジオパーク」が2008年に日本ジオパークとして認定され、2009年には日本初となる世界ジオパークネットワークへの加盟が認定された。

※油井正昭「昭和初期の国立公園指定における内務省の区域設定と国立公園委員会の審議に関する論考」江戸川大学国立公園研究所年次報告 pp.15-47、2020

〔3〕山体崩壊を伝える展示施設

島原市には山体崩壊を伝える展示施設として「がまだすドーム（雲仙巨災害記念館）」が整備されている。雲仙岳の噴火災害を後世に伝えることを目的に計画され、2002年にオープン、2018年にリニューアルオープンした。島原半島ジオパーク協議会や島原半島観光連盟と連携し、災害遺構の活用に取り組み中核施設としても機能している。

〔4〕島原市の流れ山に関する広報
展望施設である「仁田田地第一公園」をウェブサイトでは次のように紹介している。

「仁田田地第 八公園の展望所からは、山側に眉山の生々しい崩壊壁が観察出来るほか、市街地に流れ下った岩屑なだれが、無数の「流れ山」を形成している様子が一望の下に観察出来ます。また、秩父が浦公園付近では、海食により流れ山の内部がよく観察出来ます（島原半島ユネスコ世界ジオパークウェブサイトより）

仁田田地第 八公園の展望所は、流れ山が形成するランドスケープを観察するための施設といえる。設置されている案内板にも、山体崩壊が作り出す地形的特徴とともに、流れ山の分布を示す図が掲載されている。

鳥海山、磐梯山 および眉山が生んだ 流れ山を比較・考察する

〔1〕流れ山の現地調査にもつく比較

にかほ市の仁賀保・金浦・象潟の3地区では、いずれも流れ山周辺の地形との相違から、個々の

流れ山を容易に認識することができる。このうち、仁賀保および金浦の市街地には、多数の流れ山が分布しており、それぞれの流れ山は神社、墓地、公民館、公園、畑、展示台、避難所など、日常生活と密接に結びついた土地利用がなされている。

市街地に多くの流れ山が点在するという点で、島原市はにかほ市と類似している。ただし、眉山と市街地が近接しているため、規模の大きな流れ山が眉山の裾野にあたる傾斜地に形成されているケースも多い。この大規模な流れ山は、公園であったり、スパマーケットが立地していたりと、様々な形で利用されているが、現地を訪れてみると、この場が流れ山なのか、その他の地形の起伏なのか、視覚のみで峻別することは困難である。海に近づくにつれ、にかほ市と同様に流れ山が存在を捉えやすくなるが、にかほ市と比べてその数は多くはなく、密度も低い印象を受ける。

また、裏磐梯は「帯が国立公園に指定され、樹木が生い茂っているため、にかほ市と比較し個々の流れ山の形状を捉えるのは難しい。案内板では探勝路において流れ山を見つけることができる」と記されているものの、流れ山の位置を示す資料が手元になければ、その存在を見通す可能性は高いのではないだろうか。今回の現地調査において、流れ山の形状を容易に把握できたのは、諸橋近代美術館の駐車場にある流れ山や前述した「流れ山露頭」などに限られた。

以上から、にかほ市の流れ山は、市街地に個別に把握可能な状態で整理して分布するという極めてユニークなランドスケープを形成しているといえる。

〔2〕流れ山地形の形成時期が見える
にかほ市の特殊性

流れ山地形は、裏磐梯にあつては1888年、島原市にあつては1792年の山体崩壊により発生しており、いずれも100年以上の歴史を有している。これら山体崩壊は記録として残されていることもあり、流れ山が災害と結びつけられて説明される傾向にある。このことは、山体崩壊を伝える展示施設の存在からもうかがえ、災害という枠組みによって多数の流れ山が群として捉えられている。

火山活動や「流れ山」の ユニークさを伝える 施設の必要性

〔3〕地形の保存・活用に関する動向

島原半島は「島原半島ユネスコ世界ジオパーク」として日本おおユネスコ世界ジオパークに認定されており、磐梯山および鳥海山はそれぞれ「磐梯山ジオパーク」「鳥海山・飛鳥ジオパーク」として日本ジオパークに認定されている。流れ山については、いずれのジオパークでも言及されており、磐梯山ジオパークでは前述のとおり、流れ山地形が重要なジオサイトとして位置づけられている。島原半島ユネスコ世界ジオパークでは、流れ山地形を観察することができる仁田田地第 八公園の展望所を「ビュースポット」として、流れ山の内部を観察することができる秩父が浦公園を「大地のみどころ」として取り上げている。

鳥海山・飛鳥ジオパークでは、まず象潟の九十九島が見どころとして紹介されている。また、流れ山地形に関しては「高森眺望台の説明において「平野のなかに点在する大小の丘は、紀元前466年（約2500年前）に鳥海山の山体崩壊による巨大な岩なだれによつて運ばれた土砂がつくった「流れ山」である」と述べられている。その他、内陸部においては「冬節湿原」が流れ山とその間のくぼ地にある溜め池や湿原からなるジオサイトとして紹介されている。

有史以前からの歴史と、 地域のアイデンティティーに 関わる存在として

日本を代表する流れ山地形を有する裏磐梯・島原市での両地域とにかほ市との比較を通して、以下の事項が明らかとなった。まず、にかほ市の流れ山地形は、他の2地域と誕生時期が大きく異なり、有史以前から続く長い歴史を有していることが特徴である。にかほ市において流れ山は、その存在を前提として集落が広がってきたため、地域のアイデンティティーの形成により深く関わる地形的要素であることが指摘できる。また、仁賀保や金浦では流れ山を視覚的にも、認識の枠組みにおいても個別に捉える傾向が強く、日常生活と様々な形で結びつけられている。こうした特性が他の2地域とは異なる特徴的なランドスケープを生み出した要因のひとつといえるのではないだろうか。

（秋田公立美術大学 井上宗則）



さんねん山、太平山、日和山、潮見山

金浦の地形を歩く 「ながれ散歩」

鳥海山の山体崩壊で生み出された無数の「流れ山」は、象海地区だけでなく仁賀保・金浦地区にも数多く存在しています。秋田公立美術大学にかほ市は、ユニークなランドスケープを形成している「流れ山」を楽しむイベント、いっぽ には にかほ「ながれ散歩」を2023年度も企画しました。仁賀保をめぐった前回に続き、今回は金浦で開催。路地連新潟代表の野内隆裕氏による講演のほか、鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会の協力のもと大野希一氏のレクチャーや認定ガイドによるまちあるきて金浦の地形を楽しみました。

2023年11月25日(土) いっぽ には にかほ「ながれ散歩」スケジュール

シンポジウム

基調講演 「みなとまち新潟・進化する日和山物語」

野内隆裕 | 路地連新潟代表、日和山五合目館長

ショートレクチャー 「流れ山の作り方・流し方 ver.金浦」

大野希一 | (一社)鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員

ディスカッション 野内隆裕、大野希一、井上宗則 (秋田公立美術大学)



まちあるき

齊藤浄、工藤純 | 鳥海山・飛鳥ジオパーク認定ガイド

金浦公民館 → 上町・片町 → 潮見山(旧役場跡地) → 赤石様 → 港 → 浄蓮寺(公民館)

※荒天のため3時間コースを1時間に短縮して実施

地形の上に歴史は生まれる

いっぽ には にかほ「ながれ散歩」は昨年から場所を変え、金浦地区で開催しました。会場である金浦公民館が立つ場所も、流れ山。海を見下ろす標高17mのこ「さんねん山」の麓には法寿山浄蓮寺があり、頂部には金浦公民館と体育館が建っています。新潟から車で海沿いを走ってきた野内氏は、黒地に新潟と秋田の地図を印刷した自作のTシャツ姿で登場。「金浦地区のボコボコとした地形は、マテからしたら堪らない魅力」と語りながら、新潟と秋田の地形のこや、自身が実践した事例を中心に「みなとまち新潟・進化する日和山物語」と題して講演しました。

「自分の住む町を知る！楽しむ！」こ。その楽しさを発信し、自分たちが楽しんでいる姿を見せること。そうすれば世界が広がること。皆さんも自分のまちを楽しんで発信してみませんか」という結論から話した野内氏のベースには、「地形」への思いがあります。

「まずは地形があり、その上に人が住み、歴史が紡がれていく。地形の上に歴史は生まれるのだ」という視点です。最近では、自分が住んでいる場所がフリーソフトや地図アプリで手軽に見られるので、地形をなぞるように歩くことができます。するとそこには必ず歴史が紡がれているのが分かります。新潟市には新潟砂丘、にかほ市には流れ山という地形の特徴があり、その上に歴史がある。地形を意識するのは楽しい、大事だと思います」



同じテーマで各地とつながろう

新潟と秋田には北前船の寄港地という共通項があり、文化庁が認定する「日本遺産」になっています。「ストーリーで地域を魅せる」を掲げる日本遺産は各地でいろいろな物語を発信していますが、新潟市の日本遺産「フレッドは笑は野内氏」が自腹で作成したものと、今までの市が作る予定はないのと分かれたので、まずは自分で作ってみました。こういう広報物が必要とされていることが分ければ、なにかが動くだろうという期待を込めておりますと野内氏。「同じテーマ」で他の地域とつながれるのは大事なことです。つながることによって、地元の人にとって当たり前の風景に他からの視点が見られます。地形マテの私から見れば、にかほの地形は非常に面白くて興奮してしまうほど。また、秋田には方角石がたくさんあって、マテには堪らないです。例えば、野内氏が歴史や地形の楽しめ方ひとつとして挙げるのが、大正から昭和にかけて作られた名所絵葉書です。同じ場所に立つ絵葉書にある昔と現在を見比べ、金浦で野内氏はさんねん山「潮見山」「太平山」などをめぐるといいます。

現在と過去の海岸線を歩く

まちあるきの案内人は、鳥海山・飛鳥ジオパーク認定ガイドである齊藤静氏と工藤純氏です。みぞれ混じりの天候のため、当初予定していた3時間のコースを1時間に短縮。象潟地震によって約1.3m隆起した海岸線の位置を伝える遺構「赤石様」を目指しました。公民館のある「さんねん山」に始まり、「太平山」や「日和山」を眺め、旧役場跡地の「潮見山」の頂上へ。そこから「甚五郎山」「ぼつくり山」を眺め、冬の潮風が吹くなか、金浦ならではの流れ山地形を上り下りしました。路地の曲がり角の途中には、海との境を証明するかのよう「石があり、あるご自宅裏手に「赤石様」の姿が。街中にある何気ない小さな坂道は、実はかつての海岸線痕跡。現在と過去の汀線を歩いた1時間でした。



小路の現在と過去をめぐる

野内氏の話は、新潟の地形と歴史の話へ。新潟は常に砂と戦ってきた土地だといいます。

「地形目線で見ると、面白いことがたくさんあります。河川と土砂に影響を受けてきた新潟市では、カーブする信濃川の流れに合わせたまちがつくられ、通日も川の流れに沿うように曲がっています。そして小路は、川に直行するようにつくられています」

「いまも残る小路や、砂防林としての松林の存在が新潟の歴史を伝えているはずなのに、何もしないのはもったいないと思いませんか。民間で何かできないかな」と野内氏。2002年に小路の名称と歴史を記した案内板を自分で作り、許可をもらって貼るように、ある時写真家の岩合光昭氏に「新潟の路地は雲開きがあつて、スベイのアンダルシア地方の路地に入り込んだようだ」と評されたことから路地目に向けて歩くようになり、小学生も楽しめるように絵を描き入れた案内板にバージョンアップしました。小路の現在の風景からまちを紹介し、その背後にある歴史を知ってもらうという、これまでは逆の方向でまちを紹介するようになったといいます。「小路の風景と、その先にある歴史をめぐる」という視点は注目され、行政の手で案内板がすべて立つことに。さらに現在の魅力を発信したいと、小路にある魅力的な風景の絵や小路めぐりの地図をリンクさせ、7年間で6の地図ができあがりました。そして、作ただけで終わるのではなく、どんどん活用しようという地図を使いながら案内を始め、イベントではス



金浦の流れ山の作り方？

鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会の大野希氏によるレクチャーは、昨年の「流れ山の作り方・流し方」に続く金浦バージョンです。大野氏によれば、「流れ山をつくるには①たくさん噴火させて土砂を積み上げ、火山をつくる。

タンバ帳やクリアファイルを作ったり、全国路地サミットを誘致したりという展開に発展しました。

「歴史先行ではなく、風景の魅力からまちの歴史へと感心を導く『新潟の町・小路めぐり』の取り組みは2013年グッドデザイン賞を受賞しました。まちのいまの魅力をみんなが認識するきっかけになったことが嬉しい。小さなことでもまずやってみて、マテリアル化しないように進化させていくことが大事です」

野内氏は2014年、日和山12.3mの中腹にカフェを建めます。そこは、海岸に大きな砂丘ができて海が見渡せなくなり、まちの変化に気づけられ、誰も登らなくなった日和山の隣地に売地になったことから購入した土地。野内氏が「日和山登山のしおり」を作り、登ってくる人が増え、人が集まってきたことで日和山が新潟独自の地形を堪能できる場所へと新潟市により整備再されました。現在では小学校5年生の理科の教科書「学校図書」に「天候を見る場所」として掲載されたり、小学3がスケッチをしに来るようになったといいます。「自分のまちを知ること、楽しむこと、楽しんでいる姿を発信することで広がり、つながることを大事にしたいと思っています」





「鳥海山麓 野生めぐり」

かなかぶと焼畑の思想 石倉敏明

火の根源性

火は、人類にとって生命を象徴する根源的な「メント」であり、古代における「文明の証」でもあった。人類は、火を焚くことによって暖を取り、食物を調理し、外敵を遠ざけ、灯りと温もりを手に入れた。火を制御することは、人間が自然界からの恵みの中から生きるだけでなく、それを加工することで、文化という独自の次元に移行させることを意味している。火はこのように、人間が人間になる上で、欠かすことのできない媒体だと言える。

古語の火（ヒ）は、日や陽に通じている。古代の聖者や呪術師を意味する「ひじり」は、「日（暦）を知るもの」であると同時に、「火（超越性）を知るもの」であることを意味していた。すなわち、それは太陽という生命の源を、地上に分け持つことを許された人間の尊称であった。日本列島に二万年以上続いた縄文時代には、土器を使って食材を煮ることは生き物の肉や組織をやわらかく変化させて酒や食物を作り出し、自分自身の身体の内側で消化する技術となった。それは縄文という象徴的なデザインを持つ土器によって、人類が生物進化の歴史で手に入れた胃や腸の消化機能を拡張し、有機的な身体の働きを外部化することを意味していたのである。

焼畑と循環思想

野焼き／焼畑／料理の火は、人間にとって豊かな恩恵をもたらすと同時に、全てを焼き尽くす恐ろしい力の象徴でもあるのだ。火は、生命をもたらすだけでなく、それを奪うこともある。それは有機物の成分を短時間で分解し、消化することを助ける。また、野焼きによって生じる灰が次世代の植物にとって豊かな栄養をもたらすことも、古くから観察されてきた。火は、生から死へ、死から生へと転換する生命の循環を象徴する「エレメント」だと言える。

こうした両義性を持つからこそ、かつては出産に際した妊婦が別火を焚いた産小屋で子どもを産み、女性の生殖を司る性の器官は「火処（ほと）」とも呼ばれたのだ。この想像力は、自らの死を超えて火の神カグツチを出産した女神イザナギの神話を思

い起こさせる。また、「灰をまき、枯れ木に花を咲かせる」という花咲爺の伝説が象徴しているように、焼畑のような見破壊的な農法が、実は自然環境を丁寧な制御し、害虫や害獣を遠ざけながらその地域に根差した風土の食文化を作り上げてきたことは、周知の通りである。とりわけ山間地に生きる人びとにとって、焼畑という耕作法は小規模な耕作範囲で生と死を媒介し、持続可能な生産のサイクルを形成するエコジカルな技術でもあったのだ。

平沢のかなかぶ

鳥海山麓に継承されている「かなかぶ」は、「火菜かぶ」「火野かぶ」と書くことからわかるように、まさに地表に火を放ち、野を焼く農法である。実際の焼畑と播種を観察してみると、かなかぶの焼畑は、農地に自然に生息する植物を焼くことで、のちに撒く種のための、有効な土壌環境を築いていることがわかる。平沢地区では、夏のお盆前に生い茂った藪に火入れを行い、畑全体に良質な灰を広げることで、播種の準備を整える。また焼畑の火が土中に燃つている状態で、不思議なことに多くの蠅が集まり、活動を活性化させていた。

焼畑で火入れを行うことが実際の野菜の風味や栄養状態にどんな影響を及ぼすのかは、まだわかっていないことも多い。しかし、この農法が大量の化学肥料や農薬を必要とする近代農法の発想とはまったく異なる道筋で、その土地に根差した光合成エネルギーの循環をデザインし、生活技術や郷土食のレパートリーに寄与してきたことは、特筆に値する。

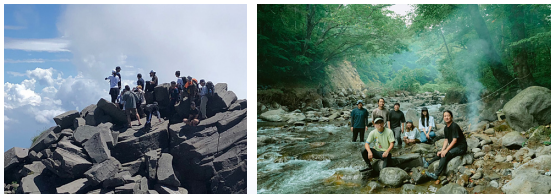
佐藤喜作氏が指摘したように、焼畑はまさに農の原点であり、人類生存の源なのである※。人類は火によって、それまで消化しにくかった肉や植物繊維を柔らかくすることができたし、野焼きの範囲を厳密に管理する焼畑の技術によって、限られた土地に栽培植物の豊かな収穫を得ることができた。世界中の諸民族によって神聖なエネルギーとみなされてきた火の思想は、何よりも野焼きや焼畑によって具体的な生活の次元に現実化されたのだ。平沢のかなかぶは、そうした人類史的な視点から見ても、次世代の持続可能な地域生態系を担う、極めてユニークな栽培技術であると言えるだろう。

※佐藤喜作「かなかぶ（火菜かぶ・火野かぶ）」『雄波郷』第三号、にかほ市教育委員会・にかほ市郷土史研究会、2009年、29頁。

《Knolling in the fields 2022 Autumn》
中島台レクリエーションの森や象潟海岸で過ごした
2022年度の記録をYouTubeで公開中！



撮影・編集:嶋津穂高



「縁側で横になって涼をとる姿」や「戸外での昼寝」を指す夏の季語である「外寝（そとね）」。環鳥海山麓のさまざまな環境下で天体／地面／身体への観察を促す『にかほでそとね』は、観察することで見えてくる体験を探索しています。2023年度は前年度とは異なる季節のなかで、参加メンバーを一新して白雪川上流部や鳥海山等で活動中です。今年の記録映像の公開もお楽しみに！

縁側で横になって涼をとるように、 さまざまな環境下で、横になる。観察する。



流れ山を広く知ってもらうために試行的に作成している「流れ山カード」に、金浦地区の流れ山が加わりました！浄蓮寺や金浦公民館・金浦体育館がある「さんねん山」（標高17.1m）、沖の島をはじめ金浦の流れ山が一望できる塩焚浜の「八幡様」（標高16.4m）、旧役場の後ろにあり半鐘山とも呼ばれていた「潮見山」（標高12m）、旧金浦小学校跡地である「日和山」（標高9.5m）など5枚を、秋田公立美術大学の学生6人が中心となって制作しました。『流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究』では、散策を促進し、流れ山を広く知ってもらうためのツールとしての「流れ山カード」の可能性を引き続き検討していきます。にかほの日常の風景に溶け込んだ流れ山のカードを片手に、金浦のまちを散策してはいかがでしょうか？



金浦地区の「流れ山」がカードに！

にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」 「にかほでそとね」萩原健一 嶋津穂高 櫻井隆平 大平真子 青木邦仁 中田日菜子 岩城佑実 佐藤若奈 「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」 井上宗則 石田駿太 石戸凛 友杉悠葉 長谷川由美 山下暁羽 吉田美菜 和田瑞生 「野生めぐりにかほ版」石倉敏明 田附勝 大東忍 大村香琳 鈴木望美 津田啓仁 コーディネーター|田村剛 伊藤あさみ（NPO法人アーツセンターあきた）

「ジオカルチャー研究プロジェクト」研究レポート《手長足長》Vol.03 2023年12月発行 デザイン|上野ゆきこ 編集|高橋ともみ 撮影|嶋津穂高 伊藤靖史 石倉敏明 萩原健一 櫻井隆平 ほか 表紙|尾花賢一 企画|公立大学法人秋田公立美術大学 制作|NPO法人アーツセンターあきた 印刷・製本|秋田活版印刷株式会社 発行|にかほ市 〒018-0192 秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田1番地 ※本紙は、にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」の一部として作成しています。 ※ジオカルチャー研究プロジェクトに関するお問い合わせ NPO法人アーツセンターあきた TEL.018-888-8137 ※本紙の無断複写・複製・引用を禁じます。